

小児科定点医療機関における病原体サーベイランスのまとめ (2016年細菌検査について)

当所では、感染症法に基づく感染症発生動向調査事業の一環として病原体の検索をおこなっています。細菌担当では、市内8か所の小児科定点医療機関から送付された細菌検査検体について、主にA群溶血性レンサ球菌咽頭炎および感染性胃腸炎の検査をおこなっています。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、ランズフィールドの分類でA群に分類されるレンサ球菌による咽頭炎であり、小児では発赤、高熱、発疹を伴う咽頭炎を呈し、重症化すると猩紅熱、続発症として急性糸球体腎炎、リウマチ熱等を発症することがあります。感染性胃腸炎は、細菌またはウイルスなどによる嘔吐、下痢などを主症状とする感染症です。原因はノロウイルスやロタウイルスが主ですが、細菌性のものも含まれます。

今回は2016年1月から12月までの1年間に小児科定点医療機関から受け入れた検体についてその検査結果を報告いたします。

最初にA群溶血性レンサ球菌咽頭炎ですが、患者の咽頭拭い液36検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌30株のT型別¹⁾結果を表に示しました。市内では、T型別不能株が16株(44%)であり、昨年度と同じ傾向でした。これらの結果は、衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンターに報告しており、全国のデータがまとめられて国立感染症研究所のホームページで報告²⁾されます。

次に感染性胃腸炎ですが、下痢、発熱、腹痛などを呈している患者の直腸ぬぐい液5検体について起因菌の検索を行ったところ、*Salmonella* Typhimuriumが同じ患者の3検体より分離されました。

表 病原体サーベイランス検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌のT型別結果

菌型	T1	T3	T4	T6	T12	TB3264	型別不能	計
2016年1～12月	6	1	2	1	3	1	16	30

¹⁾ T型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在するT蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられています。

²⁾ 国立感染症研究所 第37回衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンター等報告
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/allarticles/manual/297-labo-manual/6629-reference-report37.html>

【 微生物検査研究課 細菌担当 】